

主 旨 説 明

橋本修治（鹿児島大学医学部第二内科学講座）

ただいまご紹介いただきました橋本でございます。医学部の第二内科に在籍しております。このたび南海研センターで「熱帯と肝臓病」というシンポジウムを企画なさいますので、その司会を私にやるようにというご指名をいただきまして光栄に存じております。

申しあげるまでもなく、熱帯では肝臓病が多いのでございますけれども、鹿児島は日本の中でも熱帯に近いところに位置し、その一部は亜熱帯にかかっております。それでこのようなシンポジウムが企画されたものと存じます。

熱帯で肝臓病が多いということについては、いろいろな要因が考えられますが、一般に熱帯地域というのは発展途上にある地域であるということで、衛生面での環境の問題や食糧、さらには気温の問題もあろうかと思えます。それからもう一つは、そういった地域が熱帯であるということとは直接の関係なしに、そこで生活する住民の風俗・習慣、更に人種的な問題も多少のかかわりがあるかと思えます。そういったいろいろな因子がございますけれども、問題をいくつかに分けて、本日は、それぞれの分野からもっとも興味ある、また権威あるお話をうかがえるのではないかと皆様方とともに楽しみにしている次第でございます。

第一席の演題「ソテツの種子の含有配糖体（Cycasin）による実験的肝臓癌」は、本学の農学部の農芸化学科の小林教授、それから南海研センターの寺師教授のお二人からの発表があります。

第二席の講演は「ウイルス性肝炎の疫学、臨床と病理」と題して日本大学医学部病理学講座・長崎大学熱帯医学研究所防疫部門の志方教授が担当なさいます。

第三席の演題は「熱帯地における主なウイルス性出血熱、原虫感染症、中毒性疾患の肝臓病変」について長崎大学熱帯医学研究所病理学部門の板倉教授からご発表がございます。